



のらねこ、飼いねこになる

前回の連載時、私は“のらねこ生活”と称して定職に付かず自由気ままに動いていた。そして、ひょんなことから、この原稿を書いている現在は、自分の出身大学院である立命館大学大学院の応用人間科学研究科の実験・実習相談室という所で専門契約職員として働いている。院生時代からお世話になっている中村先生（対人援助学マガジンにも執筆されている「臨床社会学の方法」）からは「野に放ったねこが戻ってきて感慨深いです」とありがたいお言葉をもらった。笑

ねこと人と社会についての修士論文を書かせてもらった研究科で働けるのはとてもありがたく、毎日大学の猫たちに会える幸せをかみ締めている。

今回のマガジンは、大学に勤務して考えた2点を紹介したいと思う。



4月、大学構内にて満開の桜と寄り添って寝る大学猫たち（上：ガジュ、下：アニー）

今回のテーマ

- 通りすぎる人の“まなざしによる承認”。～枠を考える～
- おやつBOXと東屋の猫の理論。～主機能を補強するサブシステム～

通りすぎる人の“まなざしによる承認”

大学に勤務するようになり、毎日大学猫に会う中で、大学猫たちに学生証か職員証を正式に発行してはどうか？そう考えた時期があった。そのことについて、当マガジンの編集長であり、私の修士論文の主査であった団先生にオフィスアワーをしていただき考えを聞いてもらった。そこで先生と話した内容が面白かったので、内容を少し公開してみたい。

● オフィスアワー

私：立命館の大学猫はもう年長の猫で、6、7歳くらいになる。ノラ猫でここまで、健康に長生きしていることは素晴らしいことだし、学生や職員の“癒し”的存在としてかなり認知されている。RitsCatの学生の餌やりノートを見れば、どの猫が1年間に何日ご飯を食べにきているかがわかる、そうやって出席率が高い猫には、大学が学生証か職員証を発行して、大学が公式に存在を個別認定してもいいのではないか。いつか寿命がきてしまう。りつねこたちが、ここで生きてこんなにみんなに認められていたという足跡を残したい。



団先生

枠というものは、ガチガチのものと、あいまいなものとある。例えば、“やくぎ”は、公認された存在ではないが、世間体に存在することは認知されている。良い悪いではなく、今現在この社会の構成要素の一つであるということを皆が承知している。

“まなざしによる承認”というものがある。例えば、俺が仕事場から帰る時に通る地下鉄への道で、いつも寝ているホームレスの人がいる。その人は、その階段で住民票を取って住所登録して寝ているわけではない。俺も話しかけたりするわけではないが、いつも「いるな」と思って横を通る。嫌悪感でも好意でもなく、「今日もいるな」と思う。たまにいないと心配になって、次の日に戻っていると安心したりする。俺だけじゃない。通りすぎる人たちはいつもそのホームレスの人がいるということを認知して承認している。公的な枠で認められている存在ではないが、そこで暮らす人々の“まなざしによる承認”を得ているんや。

私：公的なガチとした枠があると、それにぴたっとはまれる時はよくても、柔軟さがなくなってしまう。とすれば、大学の猫の一部に学生証を発行してしまうと、その枠から外れた猫はりつねこじゃないことになってしまうかもしれない。“認められた存在”をつくることは、

同時に“認められていない存在”をつくってしまうことになるのか。必ずしも枠があることだけが良いわけではなくて、枠が良い塩梅で“あいまい”であることが良いことも多いのか…。確かにりつねこたちも“まなざしによる承認”を受けていると思う。それを証明できたらいいのに…。



団先生

まなざしの中でも“見守る”ということは、“放任する”ことではない。例えば、電車の中で騒ぎ倒している子どもを親が注意せずに放任している時、子どもには、周囲からたくさん人の厳しい目が向けられる。

一方、親が適度にしつけ、自分の行動をコントロールできている子どもには、「おりこうね」なんて隣の人が声をかけてきたり、周囲からやさしいまなざしが向けられる。それは、子どもの成長に影響する。

私：確かに、猫界限でも、猫への過剰な愛が放任というか、違った方向に出てしまう人の場合、逆に猫に対する周囲の反感を買って、かえって猫の立場を悪くしてしまっているケースがある。多くの人から見守られているノラ猫は穏やかに堂々と寝てたり人懐っこかったりするけど、餌やりさん一人にしか可愛がられてない場合はそうじゃない。周囲のまなざしが子どもの成長に影響を与える理屈で考えれば、りつねこが“まなざしによる承認”を受けていることを証明したいと思っていたけど、それはもうりつねこ自身が証明しているといえるかもしれないですね。



団先生

違う生き物どうしが、一部重なりながら、共存している作法を目にすると、人は安心するからな。

● 相互作用

東屋で堂々とのびのびと毎日寝ているりつねこ。それを見に集まってくる学生や職員。それは、猫たちに承認のまなざしが向けられていることの証明といえるのではないだろうか。非承認のまなざしを向けられているネコは穏やかにベンチの上で寝たりしない。キツイ目つきで睨むように、ねこもまた非承認のするどいまなざしを人に返しているように思える。しかし、それはネコが非承認のまなざしを向けているのではなく、私たちが向けているまなざしが、ネコの瞳に映し出されているだけなのでは



ないだろうか。つまり、人がねこを承認のまなざしをもって見守ることで、猫も穏やかになる。そして猫も人が近づいたり見つめたりしても良いと“承認のまなざし（あるいは承認の無視寝※）”を送ってくれることによって、人に安心感をもたらしている。

※猫の場合、“承認”の印として穏やかに見つめるよりも、人に見られていることを承知した上で“寝続けてくれること”が承認の印だと思う。

以前、どこか関東で、発達心理学を研究されている先生とネコのことです少し立ち話をした。そのときに「ネコは“おじぞうさま”みたいなものよ。だって、ねこを無理やり寝かせることはできないから。ねこが安心して寝ていると人にも安心感を与えてくれるの。」と書いていたことがすごく印象に残っている。ネコとは関係ない研修会で、たまたま会って1分ほど話した程度なので、大変失礼ながらお名前すら思い出せないのだが、その言葉だけが私の中にずっととどまっている。素敵な言葉と気づきをもたらしたと思う。

そう、ネコを無理やり寝かすことはできないのだ。穏やかにネコが寝ているだけで、ここは安心できる場所ですよ、という空気のメッセージがあたりをつつむ。



RitsCat の餌やりの時間。学生や職員、教員、地域の人が集まっている

● まとめ

今回のオフィスアワーでも、とても大事なことに気付かせてもらった。自分が愛し、見守りたい対象がいたとして、それは子どもや恋人かもしれないし、犬やネコかもしれないが、自分とその対象の1対1のマイクロな関係レベルだけでみてしまうと、ただ甘やかしたり、放任したりすることを愛だと勘違いしてしまいやすくなる。だが、対象は世界の中に存在する。マイクロな視点では自分と相手の1対1の関係だが、もう少し視野を広くメゾやマクロな視

点で見れば対象は1対多の環境におかれていることが分かる。私からのまなざしや行動が、その多の人の反感を買うきっかけにだってなりえる。

例えば、「ノラ猫が飢えたら可愛そうだから」と猫も食べきれないほどの大量の餌を人の私有地や公共の場所に放置していく方がいたり、不妊虚勢手術は可愛そうだからと餌だけあげ地域のノラ猫をどんどん増やしたりしてしまう人もいる。そういった場合、本人からの猫に対する眼差しや想いは愛にあふれているが、その行動の結果、ノラ猫自身が地域住民から嫌悪感を買ってしまうことにつながる。人間界の例でいえば、学校や職場で上司から1人だけえこひいきされると、上司は可愛がっているつもりでも、同僚の反感を買い本人が肩身の狭い思いをしてしまうことはよくある話だろう。

りつねこたちが、東屋で学生や職員が近づくことを了承してくれながらのびのびと寝ている姿が、人と猫が“承認のまなざし”を向け合っていることの証明となるのであれば、その事実が消えてしまわないように、私は対人援助学マガジンに書き残そう。そう思った第6号でした。



RitsCatの学生に撫でられて気持ちよさそうなアニー6歳（写真提供：Kameiさん）

おやつBOXと東屋の猫の理論。～主機能を補強するサブシステム～

● 実験・実習相談室

私が勤務しているのは、立命館大学の大学院、応用人間科学研究科の院生と教授を対象とした「実験・実習相談室」という部屋だ。ここは、院生が研究や実習を行う上でのサポートを行うことを目的としており、具体的には機材の貸し出しや、研究論文執筆の相談、ポスター等の印刷、学外実習の管理、その他パソコン利用や院生生活における循環し、相談といったことをできる部屋である。

● 人が来ない。という問題。

4月、暇である。院生が来ないわけではない。教授が来ないわけではない。来るものの、「PCを借りる」とか「検査具を借りる」など目的が明確に決まっているため一人当たりの滞在時間は1分程度。まだ大学に慣れていないM1にとっては、入りにくいかもしれない。とにかく暇である（仕事がないわけではないが、忙しくない状態）。私が院生だった時を思い返しても、借りたいものがある時、印刷したいものがある時、といった明確な目的がある時以外、なかなか立ち寄りなかった。立ち寄っても明確な目的があるので、滞在時間は短い。4月も中旬、院生の学外実習の手続きなどが始まり、ある程度仕事はあるが、それでもやはり、物足りなさがあった。もっと院生に気軽に来てほしい。そこで、小さな環境の変化を加えてみることにした。



● おやつ循環BOXの設置。

たまたま一人では食べきれない量のお菓子をもらった。そこで、“おやつ循環BOX（以下おやつBOX）”を設置してみることにした。3年前、私が院生だった頃は、研究科ごとに院生の研究室があり、その研究室の机のひとつが共有機となっていた。そこにお菓子を置いたり、そこからもらったり、誰かが七夕の笹を持ってくれば、なんとなく短冊に想いを書いてみたり・・・そんなゆるい間接的なコミュニケーションツールとして機能していた。旧研究室は閉鎖され、研究科をこえて共同で利用する研究施設に新設されたため、現在はもう無いが、そんなイメージのものをもう一度復活させてみようと思った。

“おやつ循環BOX”としているが、ネーミングはもっといいものを考えたい。私がお菓子をずっと供給し続けるのは難しい。しかし、さすがにお菓子の予算を取ってくれとは言えない。1人では食べきれない量のお菓子を貰うことはたまにある程度である。それはきっと他の人もそうではないかと思う。たまに沢山貰ったり、たまに買いすぎたりする。皆の“たまに”を集めればわりと継続するのではないかと思うのだ。

● おやつ循環BOXを猫の理論で考える

院生同士が管理し利用している共同研究室におやつBOXがあるのと、職員が管理している部屋におやつBOXがあるのとでは少し意味合いが変わってくる。おやつBOXを置いたことを上司に報告すると「院生の餌付けや」「え、それはいいんか・・・？」といった声も小さく聞こえた。が、まあ今のところは自由にさせてみようという見守りのスタンスを示してくれた。大目に見てくれているからいいかとも思うが、本当にこれは良いことなのか？意味があることなのか？せっかくなのでこのおやつ循環BOXの機能を猫の理論で考えてみたいと思う。



こういう時は、タイトルのごとく「そうだ、猫に聞いてみよう」である。

● 東屋（あずまや）の大学猫たち

私が勤務する立命館大学衣笠キャンパスには、RitsCat と呼ばれる大学猫サークルがあり、大学構内に住み着いたノラ猫がこれ以上繁殖しないよう不妊虚勢手術を施す代わりに、毎日の餌やりやトイレ掃除、健康管理等を行う許可を大学からサークルが得ている。こういった活動のことを“大学猫活動”と呼び、そこで生活する猫のことを“大学猫”と呼ぶ。サークルは近年増加傾向にあり、全国30大学以上に存在している。その中でも RitsCat は歴史が長い方で、何年にも渡り管理されている猫たちはすっかり大学に馴染んでいる。ちなみに、立命館の大学猫は、通称“りつねこ（立命館大学の大学猫の略称）”と呼ばれている。RitsCat や大学猫については、第2回目の連載で詳しく紹介しているので、ここでは割愛する。大学構内には大きく分けて3つのネコロニーがある。そのうちのひとつが東屋（あずまや）エリアで、主に3匹の猫が生活している。

東屋とは、次ページの写真のように、向き合うように椅子が設置された屋根つきの休憩所のことを指す。りつねこたちは、朝夕と1日2食 RitsCat の学生からご飯をもらっているため、休憩しにくる学生を目当てに集まっているわけではない。むしろ、東屋で暮らすりつねこを目的に学生や職員が集まってくることの方が多い。正確な調査をしたわけではないが、りつねこがいることによって、あずまやの使用率はぐんと上がっていると感じる。それだけでもりつねこがいる意味は大いにあるような気がするが、一旦それは置いておいて、“あずまや”が本来果たしてほしい機能は何か、整理したい。



東屋で休憩する学生と“りつねこ”3匹

横並びのベンチではなく、東屋には向き合うように椅子が設置されているのは、歴史的に休憩所としての機能だけではなく、連絡手段が乏しかった時代に、村の人たちが集まって情報交換をしたり、旅の人が休憩におとずれ、村の人が旅人から外の情報を聞いたり、村の状況を教えたりといった“情報交換、交流の場”としての機能が東屋にはあった（と、以前に出会いの研究をしている先輩に教えてもらった）からである。

以上のことから、東屋には、以下2つの機能が求められていると言える。

1. 休憩所としての機能
2. コミュニケーションや交流を生む場としての機能

「1. 休憩所としての機能」については、椅子があるというだけで、学生や職員は休憩に利用するので、りつねこの存在に関係なくその機能は果たされているだろう。

では「2. コミュニケーションや交流を生む場としての機能」については、どうだろうか。いくら、椅子をコの字型に配置したからといって、その程度の環境設定では、そう簡単に交流は生まれない。だが、そこにりつねこがいることによって、同じ猫を写真に撮ったり、あるいは誰かが猫名前を呼んだ時などに、見ず知らずの者同士で会話が始まったりする。りつねこがそこにいることで、あずまの本来機能が発揮されている構図がある。



昼休み：りつねこの写真を撮る通りすがりの職員さん

また、椅子は腰を下ろせることから、体力的な休息を人に与えてくれるが、可愛いりつねこは精神的な休息を人に与えてくれる。したがって、りつねこには、東屋の休憩場所としての機能を強化する要素もあると考えられる。

つまり、東屋におけるりつねこは、“東屋”本来の機能が発揮されるよう支え、強化している“サブシステム”として機能していると位置づけることができるのではないだろうか。もちろん、りつねこ自身や、お世話をしている学生が、東屋のサブシステムを構築している意識を持って行動しているわけではない。彼らは、大学の中でノラ猫と共存するシステムを構築し、維持しているだけだ（うまく大学猫活動が機能していない大学にとって猫は、不衛生で苦情の対象となる厄介者として扱われている。そういった大学で猫がたむろしているベンチの利用率は下がる）。一見関係のないように思えるもの同士でも、それぞれのシステムは影響し合っていることが面白い。

● おやつBOXをあずまやの猫の理論で考える

実験・実習相談室におやつBOXを置いたことについて話を戻す。

実験・実習相談室の機能は以下の通りである。

- ・ 機材の貸し出し
- ・ ポスター等の印刷
- ・ 実習のサポート管理
- ・ 研究論文執筆の相談
- ・ 院生生活における相談

上段の3つは授業や実習を受ける上で、必要不可欠なため、今でも十分機能している。だが、下段の2つは、利用してもいいと知ってはいるが、必要不可欠な要素ではないため、なかなか機能しにくい状況がある。「これくらいのことでは相談するのはどうかな」と勝手に相談のハードルをあげ、利用をセーブされてしまっている。来やすい場であることは、本来機能を果たす上で重要である。いくら設備やスタッフが充実した部屋であっても、利用しやすい環境がなければ機能は錆び付いてしまう。

その中で“おやつBOX”があることによって、備品の貸し出し手続き中の話題になり、院

生と職員が必要時事項以外の話をするきっかけが生まれる。すると、少し打ち解けることができる。それを繰り返していると、今度は、「お土産いっぱいもらったから」など、備品の貸し出し等の用事がなくても、実験・実習相談室に足を運んで、おやつBOXにお菓子を置いていってくれたりする（写真モデル協力：RA松元さん、貸し出しカウンターにて）。



そういった立ち話から、どんなことに関心があり、どんな事に不安があるのかなど、院生を理解するうえで必要な情報がポロっと出てきたりする。“相談”しなくてはどのようなレベルになる前の“ちょっときになる”レベルのところで、話をしやすくなる。相談される側もその段階で話してくれた方が、予防的対応をとる事ができるかもしれない。それによって、実験・実習相談室の機能のうち、うまく稼働しきれていない「**研究論文執筆の相談・院生生活における相談**」といった機能を活性化させることに一役かってくれるのではないだろうかと期待している。

おやつBOXの機能は自身だけでは不必要にみえる余分なものだか、相談や資料探しといった本来ある機能をより潤滑に活発に稼働させることに役立つ実験・実習相談室のサブシステムとなるはずだ。



大学構内を歩きつねこのアニー

繰り返しになるが、“大学猫”も“おやつBOX”も一見それ自体は余分で不必要な機能に見えたとしても、システムのマネジメント次第で、“本来機能を活性化するサブシステム”として機能することがある。

“余分”の受容が心に“余裕”を生む。

“余裕”ができると、いろんなシステムがスムーズに回りだす。

じゃあ、“よぶん”は“ようぶん（養分）”なのかも。笑

おわり

小池英梨子

立命館大学院応用人間科学研究科対人援助額領域 2015 年修了

猫を切り口に、共生と共存社会のリアリティについて研究

公益財団法人どうぶつ基金に 2 年間勤務し、犬猫の殺処分ゼロを目指す取り組みに従事。

現在は、立命館大学 衣笠独立研究科事務室 応用人間科学研究科 実験・実習相談室で契約専門職員として勤務しながら、「ねこから目線。」としてフリーで猫活動中。

